



Why it's awesome to be an August baby Donna Rasalan Lampa

It's a happy coincidence that all of my pregnant friends living in the Kamikawa subprefecture are due to give birth this summer. There are five of them, but three would have already given birth by the time this article gets published! I'm pretty excited to celebrate the arrival of so many babies in this warmest of seasons, particularly because the low birth rate and aging population here have been a concern for Japan.

Birth rates have also been declining in my home country, but this is welcome news for the Philippines since we've been working to address overpopulation there. Despite this problem, though, Filipinos still consider children to be life's greatest blessing and a source of good fortune. Add to that our Chinese-influenced belief that the number 8 is a lucky number, and you can imagine why I'm amused that some of my friends' babies will be born in August, the 8th month of the year. According to my culture, they will be twice as lucky!

We even have this tradition back home of buying food for a pregnant friend or paying for her meal when we're dining out because we believe that by doing so, the baby would send some luck our way, too. I don't buy any of this myself, but I happily observe this practice even while I'm here in Japan because it's such a kind and thoughtful gesture. If you're the one expecting, wouldn't you also want to be taken care of in this way while you are nurturing life inside you?

8月生まれがすごい理由 ドナ・ラサラン・ランパ

うれしい偶然ですが、上川管内に住む妊娠中の友人が、みんなこの夏に出産予定です。この記事が出る頃には、5人のうち3人が出産を終えているでしょう。この一番暖かい季節に、こんなにたくさんの赤ちゃんが生まれるのは、特にこの少子高齢化の日本では、とてもわくわくすることです。

フィリピンでも少子化が進んでいますが、これは人口過密問題に取り組む母国にとっては喜ばしいこと。でも人口過密問題があるにもかかわらず、フィリピン人にとって子どもは人生最大の恵みで、幸運の源です。おまけに中国の影響で「8」はラッキーナンバーなのですから、友人の赤ちゃんが8月に生まれることを私が楽しく思っていることはお察しい

ただけるでしょう。母国の文化では、赤ちゃんは2倍縁起がいいのです。

妊娠中の友達に食べ物を買ってあげたり、外食でご馳走する習慣さえあります。そうすれば赤ちゃんが幸運をもたらしてくれると信じているからです。私自身は、これ信じているわけではありませんが、日本にいるときでも喜んでこの風習を守っています。とても親切で思いやりのある行為だと思うからです。もし、あなたも妊娠していたら、お腹の中で命を育てているときに、そんな風にしてほしいと思いませんか。

(訳:宮地晶子)

英語教育指導員 宮地晶子の

エイゴノマナビカタ

第183回

一意専心

アニメ『鬼滅の刃』のグッズが巷にあふれています。目を引くのが、堂々とした漢字の字体(フォント)。これが全て元は手書きだと言うのだから驚きです。字体の作者は鹿兒島生まれの坂口綱紀さん。画家を志して京都へ行きましたが、「中卒」だと馬鹿にされ、故郷に戻り看板屋になりました。看板文字の手本が欲しくて町中の看板を半紙に写して歩きました。その数3年で3,000枚。電柱によじ登っていて職務質問されたこともあったとか。そうやって

作った手本をまねして、どうにか看板の仕事をできるようにになりました。ところがあるとき、もらい火でお手本が全て消失。坂口さんは途方に暮れます。それでも注文はあるので、覚悟を決めて書く。すると、なんと手本なしでもきちんと書けたのです。もう頭に全部入っていたのです。このエピソードに鳥肌がたちました。私の座右の銘「自分しかいないと思ってしっかりやりなさい」を思いました。自分しかいないと思ったら、思わぬ力が出るものです。その後、機械化で毛筆の需要が減っても、ひたすら練習を続けた坂口さん。転機が訪れたのは、取引先の一言。「その貴重な毛筆をフォントにしてみたら?」。これがゲーム会社の目にとまり、三国志をモチーフにしたゲームに採用されます。その後は、『鬼滅の刃』以外にも実写映画『銀魂』、両国国技館の大相撲の優勝額、セブンイレブンのおにぎりのパッケージ、ドラマ『陸王』などに続々と使われるように。86歳の今も毎日、研鑽を続ける坂口さん。集中して筆を運ぶ姿に感動します。私のもう1つの座右の銘「専心すること」そのものです。